

当報告の内容は著者の著作物です。

文法研究ワークショップ（第1回）～「形容詞」をめぐる諸問題

開催日時：平成23年5月28日（土曜日）午後1時～午後5時30分

開催場所：AA 研小会議室（302 室）

報告1

報告者名：麻生玲子（日本学術振興会／AA 研）

報告タイトル：波照間方言のいわゆる形容詞

報告2

報告者名：Kazuhiro Imanishi（日本学術振興会／東京大学大学院）

報告タイトル：Noun, verb and stative aspect in Amis

報告3

報告者名：長谷川明香（東京大学大学院）

報告タイトル：五感に関わる表現：英語の知覚動詞を中心に

コーディネーター：児倉徳和（日本学術振興会／元 AA 研特任研究員）、大塚行誠（AA 研研究機関研究員）、児島康宏（AA 研研究機関研究員）

ワークショップ概要：

本ワークショップは、記述言語学を志す学生や研究者が最新の研究成果や調査データを紹介しあうことにより、学生・研究者の交流や最新の情報の共有を促進することを目指して企画された。その第1回として、「形容詞」をトピックに、3名の大学院生が報告を行った。（なお、本ワークショップは、もともと3月末に予定されていたが、震災のために開催が延期となっていたものである。）

いわゆる「形容詞」的な内容を表す語は、世界の諸言語では「名詞」または「動詞」の一部に分類されることが少なくない。その一方で、このような内容を表す語は、典型的な「名詞」や「動詞」とは異なる特徴を示すことが多く、扱いが難しい。ワークショップでは、波照間方言と台湾のアミ語における「形容詞」的な意味を表す語の位置づけ、また、英語の知覚動詞による対象の属性の表現について議論された。

会場への出席者は11名。さらに、ワークショップは Ustream を通じてインターネット上で放送された。それを利用して、遠隔地からも数名の参加者があった。遠隔地からの参加者の質問やコメントは、Twitter などを通して受け付けた。会場内外の参加者により、各報告について活発な質疑応答が行なわれた。

Ustream によるワークショップの放送は、新しい試みとして、利用者から好評であった。ただ、「小さな画面を長い時間見続けるのはとても疲れる」「現場の空気がつかめないの、それを汲みとった上での質問がしづらい」というような意見・感想もあった。

報告書作成：大塚行誠（AA 研研究機関研究員）、児島康宏（AA 研研究機関研究員）

報告要旨

報告 1：「波照間方言のいわゆる形容詞」（麻生玲子、日本学術振興会／AA 研）

本発表では、以下の二点について論じる。

1. ある言語が形態統語的に形容詞という語類を設定できる場合に、通言語的にその語類が表すとされている代表的な意味（Dixon, 2004）を、波照間方言ではどのような形式で表すか。
2. それらの形式はどのような形態統語的な特徴を持ち、どのような分析が適しているか。

結論としては、波照間方言は形容詞の代表的な意味を動詞で表す。さらにそれらの動詞語幹（Property Concept 語幹）に着目すると、動詞語幹あるいは動詞語幹に派生する前の語幹に単独用法があり、PC 語幹はいくつかの下位分類が可能ではないかと考察した。

報告 2：“Noun, verb and stative aspect in Amis” (Kazuhiro Imanishi, 日本学術振興会／東京大学大学院)

アミ語（台湾）の動詞と名詞の間には二種類の連続体が認められる。一つ目は語根から名詞、動詞を形成する際に見られる連続体で、「物体—恒常的状态—結果としての状態—動作」という階層を為している。これは時間的に固定したものかどうか、という認知的・意味的要因の階層である。通言語的に「形容詞」と呼ばれる語はこの階層の真ん中に位置するが、アミ語で「形容詞」を認めるかどうかは難しい問題である。もう一つの階層は品詞の階層で、「名詞—動詞的名詞—動詞」という階層である。これは表層の統語における区別が現れた階層であり、談話における「参与者の指示（名詞的） vs. 事柄の発生を述べる（動詞）」の対立が現れたものである。

報告 3：「五感に関わる表現：英語の知覚動詞を中心に」（長谷川明香、東京大学大学院）

英語の五感に関わる動詞（知覚動詞）およびその構文(1)-(3)を出発点とし、知覚対象の属性がどのように把握されるかを考察する。(1) 意図的知覚を表わす構文 (e.g. I am tasting the soup.) (2) 非意図的知覚を表わす構文 (e.g. I taste salt in the soup.) (3) 受容的知覚を表わす構文 (e.g. The soup tastes salty.) 各構文の意味や構文間の繋がりについて確認したのち、(3)において言語化されない知覚者がどのような存在であるのかについて主観性との関わりで検討する。日本語の対応表現との対照を適宜行ない、日英語の違いについて論じる。